

子どもの本のひみつ

Vol. 1

題字・イラスト 陣崎草子

言わせて!

2017年6月17日、豊島区立目白図書館集会室にて、「連続トークイベント 子どもの本のひみつ①」が開催されました。トークゲストの新藤悦子さんと陣崎草子さんから、魅力的な言葉がいろいろと…。



Soko Jinsaki

子どもは、**マイノリティ**である

からこそ、見えることがあるんじゃないか。

(子どもにコミットしていく理由)

イスラムの女性の**本音が聞きたい!**

(国際関係学を学びフィールドワークをはじめたきっかけ)

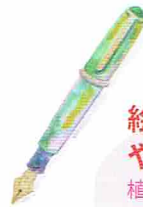


Etsuko Shindou

義父を看取る日々、生命力がもっていられるようなその時間に、物語を書いた。

物語を書くと、力が戻ってくるようだった。

(カッパドキアの友人の洞窟ホテルをモデルにした『月夜のチャトラバトラ』を書いていたころ)



絵は何か**大きなもの**のやりとり。

植物が描いてほしいと言っているような気がする。そういう何か原始的なものをまるごとうけてくれるような子どもの意識にひかれる。

(『おむかえワニさん』など絵本について)

かつて生きていたある人が、自分を動かして、情報を送ってくれて、助けてくれていると思えるような、**ふしぎな現象が続いたんです。**

(『桜の子』を書いていたとき)

西アジアのニュースというと戦争のことはかり……。

でも、**戦争していても、人々は暮している。**

その積み重ねをとらえたい。

(戦争中のイランで)

イスタンブルはほんとに猫が多い町で、**猫が多い町は敷居がひくい**感じがします。そんな町を書いてみたかった。

(『イスタンブルで猫さがし』について)

世界って何だろう…という問いが表現につながる。その表現は「児童文学」にこだわらない。いろいろな入口があっていい。

(『児童文学』とは)

戦争、差別、犯罪……、

そういったものを人間はなくすことができるのか、「物語」を書くようになって、そのことを強く考えるようになった。

(『児童文学』とは)

歌集『春戦争』より

こんなにもだれか咬みたい衝動を抑えて
紫陽花の似合うわたしだ

どうせ死ぬ こんなオシャレな雑貨やら
インテリアやら永遠めて

(『リクルートスーツを着る気はない』『絵本作家になりたい』『ひとりりで生きていく』『女性である』『オシャレに興味ない』)

……若き日のそんな**まがまがしいほどの怒りを吐き出す場所**として短歌があった。

ぜんぜんちがう考え方ができる、**別の世界がある**、と思うと救われる。

(西アジアなどに行って、友だちができて、よかったと思うのは)

子どもの本では、**「つよいあこがれ」を書きたい。**

たとえば、おいしい食べもの、歌、ふしぎなこと…。そういうものは、「いいもの」をもってきてくれる気がします。

(『児童文学』とは)



1961年、愛知県豊橋市生まれ。東京在住。津田塾大学国際関係学科卒業。児童文学者。1985年、カッパドキア地方の村に半年滞在し、村の女性と共に暮らし、教わりながら絨毯を1枚織り上げる。その時の体験をまとめたものなどトルコを中心に、中近東に関するノンフィクション作家として活躍の後、創作児童文学にも取り組む。トルコの青いチュリップ文様のタイルに着着想を得た歴史ファンタジー『青いチュリップ』(講談社)で日本児童文学者協会新人賞を受賞。

『月夜のチャトラパトラ』(講談社)

トルコ、カッパドキアで洞窟ホテルを営む夫婦に育てられている少年カヤ。実はカヤは赤ん坊の時、洞窟の中で発見されたのだ。カヤには秘密がある。洞窟の中で、おとなには見えない、3人のこびとたち(チャトラパトラ)と仲良くなったのだ。冬を迎えようとする洞窟ホテルの客は日本人の画家ヨーコとフィンランド人の考古学者ミッコ。思いがけず、このふたりとチャトラパトラに関わりが……、カヤの気持ちは揺れるのだった。



『イスタンブルで猫さがし』(ポプラ社)

クラスでの人間関係に疲れた愛は、父親の赴任先イスタンブルに行き日本人学校に通う。憧れのワン猫(真っ白で左右の目の色が違って緑と青!という美しい猫)ミライを探して、日本語補習校の生徒・単人や日本人学校の同級生・未来とともにイスタンブルの街を駆け巡る。ブルーモスクなど街の景色の中で、トルコの人々そして仲間との触れ合いの中に、愛がみつめていくものは……。



大繁華街池袋と、落ち着いた住宅街の目白。気ままに歩いていると、意外に古めかしい建物があったりで、イメージとはちょっと異なる景色も見られるかもしれません。



書店が多いのはやはり池袋駅周辺。駅に隣接した商業施設には、三省堂、旭屋書店、くまざわ書店といったチェーン店が入っています。そしてなんとといっても、東口のジュンク堂池袋本店。この児童書売り場は充実していますし、店員さんも本に詳しいです。目白と池袋の間の住宅街にある、ブックギャラリーポポタムもファンの多い店で、絵本作家さんの個展なども開催されています。

周辺の大学めぐりはいかがでしょうか。池袋西口の立教大学といえは赤レンガとツタのイメージ。シンボルの本館は東京都の歴史建造物指定です。灰田勝彦のヒット曲「鈴懸の径」のモデルとなった並木道も(歌碑もあり)。目白にある学習院大学は、緑豊かなキャンパスで、こちらにも歴史的な建物があります。日本女子大学は、石井桃子やいぬいとみこも学んだ児童文学と縁の深い大学ですが、ここまですると早稲田大学もすぐ近く。

児童書では、あまり思い浮かばなかったのですが、上條さなえ『10歳の放浪記』に池袋界隈をさまよつたシーンがあります。これは自伝作品で、創作物語ではありません。青春小説『トキヨー・クロスロード』(濱野京子)の主人公が目白在住です。

1977年大阪府生まれ。東京在住。画家、絵本作家、児童文学作家、歌人。大阪教育大学芸術専攻美術科卒業。26歳で絵本作家をめざして上京。穂村弘の短歌に出会い作歌をはじめ。『草花散歩会』のナビゲーターとして、草花に関するイベントを主催している。『草の上で愛を』(講談社)で第五十回講談社児童文学新人賞佳作受賞。

『桜の子』(文研出版)

暴れ川として知られる青竜川。そのそばにある小姫神社で、「桜の子」のお骨を探すことになった香衣と糸子は、幼なじみで同じクラスの5年生。クラスでいじめられ、家庭にも何か問題をかかえている糸子に掛けたい言葉が香衣にはあるのに……。『桜の子』とはだれ?ふたりの少女のかけがえのない時間が物語に紡がれていく。



『おもひえワニさん』(文芸堂)

絵本。見るも楽しい表紙は、色とりどりにぎやかな草花や生きものたちのまん中をちよちゃんとワニさんがドーンと立っている田舎道。ばあちゃんちに行く駅でちよちゃんを待っていたのは、こわいちのおつかいのワニさん。森をぬけ、お祭りをぬけ、おばけだつて、ワニさんといっしょなら、大丈夫?さて、おばあちゃんちに着けるかな……。



『春戦争』(書肆侃侃房)

歌集。「二十代の終わりに短歌という衝撃と出会った。歌、といわれるこの言葉のつらなりは、内に湧いたエナジーの正体に問いかける祈りだった。」(著者あとがき「以来ずっと」より)

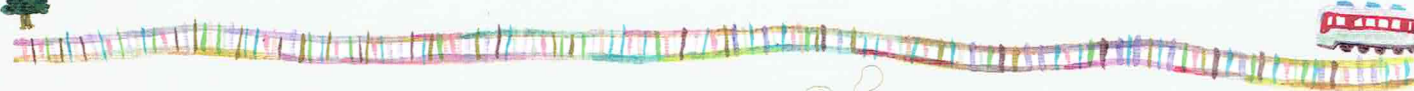


目白池袋界隈散歩

新企画のトークイベント「子どもの本のひみつ」の記念すべき第一回の会場は、目白図書館でした。終了後、そこから池袋駅まで散策するオプショナルツアーでは、びわの実文庫を主宰していた坪田譲治の旧居や、「赤い鳥」にちなんだ赤鳥庵を有する目白庭園、明日館などを眺めながら歩きました。この界隈、「赤い鳥」に深く関わりがあるようです。

さて、目白や池袋を舞台にした文学作品で、まず思い浮かぶのは「池袋ウエストゲートパーク」(石田衣良)。ドラマ化もされたヒット作です。かつて闇市があったという西口公園は、物騒な場所と言われた時代もありましたが、芸術劇場もでき、すっかりさま変わりしました。『桜雨』(坂東眞砂子)は池袋モンパルナスを舞台にした恋愛もの。目白に関する小説では、金井美恵子に目白四部作と呼ばれる作品群があります。そのうちの一作『タマヤ』を読みました。突然ネコを押しつけられてしまう青年の軽妙な一人称語りの物語です。

児文協研究部 「連続トークイベント 子どもの本のひみつ」 今後の予定



第2回

トークゲスト 野坂悦子 × 濱野京子 司会 井上征剛
日時 11月23日(木・祝) 14時~16時
場所 ナーブル・ホームサロン
(山梨県甲府市城東4-7-17 JR中央本線・身延線「甲府」駅よりバスにて「甲府市立図書館入口」下車)

第3回

トークゲスト ひこ・田中 × 目黒強 司会 相川美恵子
日時 2018年3月21日(祝) 13時~15時
※希望者は、その後「寺田屋」周辺の散策。
場所 京都文教大学・京都文教短期大学
サテライトキャンパス伏見大手筋
(京都市伏見区東大手町755 近鉄「桃山御陵前」駅・京阪「伏見桃山」駅より徒歩5分)

どなたでも参加できます! ぜひどうぞ。詳細は、日本児童文学者協会HPにて <http://jibunkyo.main.jp/>